

# 松平定信の半面

雨 峯 生

1 定信の系圖 昔から將門將を出し、相門相を出すとやら申しまして、源氏のやうな武門の家からは、頼光を始めとして、頼信、頼義や、八幡太郎義家、鎮西八郎爲朝や頼朝義經に至るまで、えらい武將を出して居る。又藤原氏のやうな政治家の家柄では、先祖の鎌足を始として、不比等、良房、基經より道長に至るまで、なかく／＼えらひ宰相を出して居る。して見れば、徳川中興の祖吉宗を祖父に持ち、文學に秀ひたる田安宗武を父としたる松平定信が彼のやうに傑出したのも敢へて怪しむには足りまい。定信は實に吉宗公のお孫で、宗武卿の三男であつたのである。

2 定信の誕生 龍は生れて昇天の氣あり、虎は生れて食牛の氣ありとか昔からいひ傳へてある。徳川時代の英傑なる定信も既に幼時嶄然として頭角をあらはし、普通の兒童と異なつたところがあつ

たやうである。さて定信が始めて呱呱の聲をあげたのは、寶曆八年(紀元二四一八)の十二月廿七日であつて、生れた所は田安の邸である。幼名は賢丸といつて、矢張り田安の邸で保育を受けたのである。幼年の間は生れつき虚弱であつて、度々病み煩ひをされたのであるが、醫者の盡力や灸藥のお蔭で大きくなられたといつて宜しい。六歳の時には殊に大病を病まれたが、鳥朔庵といふ者の治療で漸く命をお救ひ申したといふとである。

3 將軍の寵愛 賢丸が五歳の時、田安の邸宅が火事で焼た。將軍から御上意があつたので、父母兄弟と共に、取り敢へず將軍の本城へ移られた。そして暫時御滞在して居る其の中に、時の將軍家十代家治公の御氣に入り、非常に寵眷を蒙つた。それだから宗武卿をはじめ外の者は皆五六日たちて、假りに徳川宮内卿宗尹の一橋の邸に移られたけれども、獨り賢丸ばかりは、本城に遣り留まつて、將軍の小さき愛者となつて、其の膝下に戯れて居つた。將軍は、賢丸が身軀は虚弱であるが、非常に英氣のあるのを愛で、たびたび此の兒を

そ我が家を興すだらうといはれたといふとであるして見れば賢丸が常人と異つて居つたのは、かやうに幼少の時からである。

4 定信の勉學 賢丸がはじめて假字を習ひ、またはじめて孝經を讀みならつたのは七歳の時である學問の先生は大塚孝緯といふ田安家の儒臣であつた。孝經の始に夫孝徳之本也とあるを讀むに當つて、徳とは何の事かといふ質問を發せられたので、先生の大家は深く驚いて、是尋常の子供の氣がつくべき事柄でない。誠に未頼もしき若君であるといふそかに申したとやら。十歳の時分からどうかして我が日本は勿論、唐土にも自分の名を知られるやうな、えらい事をしたといふ志を立てられた。讀み習つた孝經の中に、身を立て、道を行ひ、名を後世に揚ぐとあるが、どうしたらば身を立て道を行ふ事が出来るか、それがよく分らないので、先生の大家に御尋ねになつた。大家は答へて申しますには、よい處にお氣づかれました身を立て道を行ふには、學問を勉め勵むより、外に手段も方法もない。但し學問といふものは兎角

世間の事情に疎くなり勝なものであるから、つとめて下情に通ずる様に御心掛けなさるが肝要であると申しあげた。立居ふるまひが自づと他の兒童と異なつたといふのも、志が堅く立つたからで、又諸役人の詰所などへ行き、様々の物語などを心をとめて聞かれたといふのも、つまり下情を知つておいて、後年政を執る時の助にしやう、それに公子の時でなければ、かやうな事を聞きとは出来ないと思はれたからである。公が非凡の性質を持つて居つたのは勿論であるが、又先生の大家の盡力も亦没すべからざるものがある。後年大家がなくなつてから、定信が自ら碑銘を御造りになつたといふのも、無理のないと思はれる。

5 定信の慈悲心 こゝに定信の幼時に、人を思ひやるといふ心があつたといふ逸話がこのつてゐる。それは十二歳の時であつた、麻布鳥居坂の旗本の士、戸川内膳の家から火事が出て、其の邊の町家が火へんやけて、焼け死んだものもあつたが、其の時誰が作つたか分らないが、こんな落首をしたものがあつた。

この火事は人の命を鳥居坂、これより上の咎は内膳、一寸面白くよんであるので、皆々面白がつて、口巧者によんだなど、批評し合つた。其の時定信は傍に居つて、私ならさうはよまないと仰しやつたので、奥醫者の某といふものが、それでは何と御詠みになりますか、と繰り返し強ひて尋ねたので、

この火事は人の命を鳥居坂、怪我の事なり戸川内膳、かうよむと御答へになつたといふ事である。

小さな事であるけれども、しかし歌の意味はまるで反對になつて、怪我過に出た火事であるから罪咎はないといふ事になつてしまつた。これでもつて、人の上に立つ事の度量がお有りになる

と、いづれも皆未頼もしく思つた。

6 定信の詩作並に最初の著作 定信は既に志が立つた、學問修業に身を入れた。行は既に普通の兒童と異つて居る。されば學問に於ても其の造詣する所は決して少くはなかつたやうである。年が十三歳になつた時には、自教鑑といふ書物を綴つて自己の行を正し、自己の反省の料に供しやうと企

てられた。中にかいてある事柄を見るとよく儒教が消化して居つて、之を自己修養の規範にされたやうに思はれる。今の兒童の梯子をかけても及ぶところでないと思はれる。父君の宗武卿は之を見て大に喜ばれ一部の史記を褒美として定信に取らせ、ますます學問奨励をせられたさうである。其の頃つくられたといふ雨後の詩に

虹晴清夕氣 雨厭散秋陰  
流水琴聲響 遠山黛色深

といふのがある。また七夕の詩に

七夕雲霧散 織女渡銀河  
秋風鵲橋上 今夜莫揚波

ななどいふのがある。菅公が十一歳の時に月輝如晴雲云々梅花の詩を作られたのは歴史上有名な話で、又菅公の夙成早熟を驚嘆する譯であるが、定信の詩作も實に夙成早熟、感歎に價すると思ふ生長せられてから詩は作られなかつた。此の頃晝も夜も少しも暇があれば弓術を好んで練習せられたやうである。猿樂などは習はれたけれど、一年たない内にやめられた。

7 讀書拍案 ある日後漢書を讀み、陳蕃が慨然として、天下を清むるの志ありといふ所に至り、感歎の餘りはたと膝を打たれたといふ事だ、それは定信も以前よりかく志されか事であるから、古今隔はあれども、東西地を異にすれども、恰も割符を合せたやうなるを感じられたのである。此の時分徳川氏の天下は、まだ陳蕃の出た後漢の桓帝靈帝などの時のやうに、亂れては居なかつたが、しかし泰平年既に久しくあつて、殊に田沼重次やうなわるい人物が出たため、社會は大分腐敗し始めて居た。この時に當つて定信のやうな抱負の大きい人が出たのは實に必要があつたのであるし、又徳川氏のためにも、天下の人民の爲にも幸福であつたのである。

8 定信の修養 定信は生れつき氣が短く、癩癩が非常に強くあつて、聯の事に腹を立てられしかば、師の大塚近侍の水野爲長等かはるがはる之を諫めて、性急と癩癩は度量が狭いのに原因します昔から事を成した人で、度量の狭かつた人はない。郎君の如き人の上に立つ御身では是非とも度量が

廣くなくてはならぬ。性急と癩癩とは立身行道の仇である。之を抑へて度量を廣くするが己に克つといふものであると申したから、定信は深く其の言葉に感心し、深く自ら戒め、工夫をこらして之を折制せられたから、十八歳の時分には、性質ががらりと變つてしまつて、寛仁大度うるはしい徳を備へる所の人となられた。

10 定信の孝悌 御父君宗武卿は、性質もしつかりして居られるし、學問もあられた方である、自分を將軍家の輔佐を以て自ら任じ、直言して時事を論ぜられたことから、將軍の御旨にさはり、一時他に御預になられたともある御方である。十分の器量は持て居られたのであるが、つまり當世には用ひられなかつた方である。それ故に我が子たる定信が器量拔群で、將來非常に有望であるから、如何に其の前途の發展を樂しんで待つて居られたでわらうか。定信が十三の歳に自教鑑といふ小冊子を綴つたのを見て、我が子ながらも實に群兒に異なるるところあるを御賞美あつて、一部の史記を賜つた其の喜はどれ程であつたらうか。想像するに

餘りがある。定信が如何に發展するか其の發展を見ずして十四歳の時に御父君はなくなられた。定信のなげきはどれ程であつたらう。親に仕へて非常に睦まじく、世の常と異なつて居たのであるから想像するに難くはない。これからは御兄さんの大藏卿治察に仕へて、能く敬と悌をつくされたといふのである。白川の松平家にゆかれてからは、心をつくして、養父母を慰め、孝順の道をつくされた。たとへば、毎朝御用達といふ役人を、西城の下の御屋敷から、八丁堀の御屋敷まで、やつて、養父母の御機嫌を何はせて、御用達が戻れば、次の間に出て謹んで御様子を御尋ねになります。とりわけ、養父定邦が中風を病まれたからは、醫者よ薬よとよく心を盡され、いさゝかも看護のなはざりはなかつた。そして少しでも粗忽があつては不孝の大なるものと恐れて居られた。定邦の病氣がはいなほつて、御同道にて登城せられたときは定信は其の手を執りて扶けながら通られた。又いつの年であつたか、例のやうに扶けて登城せられたのに城内のどこの場所であつたか、定邦は草履

がないので前後見合せられた時、定信は新しい草履を懐より取り出して進められたといふまでである。定邦がなくなられて、御養母青松院、寡居してさびしければ、御慰に三味線囃などする者を召しよせ、一時の興を催し給ふ時、定信が若し儼然として、其の側に坐して居られては、御養母をはじめ、一座の者が皆、氣遣に思つて、御面白かられぬものだから、定信はつとめて、御自身人形つかふ真似などをして、御心を慰められたといふのである。されども、御自分が御好なら兎に角、かやうな事は此の時の外はとんとなかつたといふのである。とても今時の若い人達の氣がつくとではな

いと思はれます。(未完)

●自然的運動

餘り體育に重きを置き過ぎると腦力の發達を妨げる健康な心では健康な体に宿るといふが、体力と腦力とは全然一致するものではない、何でも自然に反するものは好くない、早い話が牛乳である、朝夕搾り取ると乳牛は苦しいから体が弱わる、其の牛乳には細菌がある、これは牛に取つて不自然であるから、運動は人爲的よりも自然の方が好い (三宅雄次郎)